

■ウィンド Etc. (風のエトセトラ)

風力雑感

ジャパン・リニューアブル・エナジー株式会社 取締役会長 安 茂

逆風に向かう風力

一般的な風車は前から風を受けて発電します。つまり、風車は常に逆風に向かっていて、同じ様に風力業界も常に逆風に向かって一歩一歩成長してきました。風力業界を樹木に例えると、強風に常に煽られている扁形樹、いや年輪が非常に密な樹木と言った方が良くもありません。

風力担当者の苦しみ

この逆風に企業として耐え続けるのには、努力とほんの少しの運が必要だと思えます。私の場合、この仕事に身を投じて 17 年、風車の法定耐用年数を過ぎようとしています。ちなみに今建てようとしている風車の FIT 買取期間が終了する 20 年後は、私は立派な後期高齢者。話は戻って、これだけ長く続けられたのは、沢山風車を建てたからではなく、成果がほとほとどの範囲に収まっていたからだと思います。やりすぎて、風力から撤退してしまった会社も多数あります。大企業で風力発電の事業や開発・建設を行っている風力担当者の最大の課題は、如何に上層部の理解と承認を得るかという点にあります。大企業における風力事業の立場は脆弱な事が多く、何でこんなリスクの高い、利益の薄い事をやっているんだ！との声が有る一方で株主総会や CSR の資料の常連となっているのが現状だと思います。

風力は魔物

企業は風力から撤退することが有りますが、不思議な事に風力への関わりを続けたいという理由で、人も羨む一流企業を辞める人が沢山います。「風力は魔物」。誰が言い出したか分からないけれど、風力業界で良く聞く言葉です。風力を好きになってしまっ、一生関わって行きたいと思ってしまう。私が思うこの仕事の魅力は、何も無いところから物を創る喜び・・・というのは公式見解で、工場検査や先進地視察と言えばヨーロッパ。建設場所の現地調査といえば地方の美味しい物に出会える。こんな美味しい仕事はあまり無い。

勇気の出る言葉

7~8年前から秋田で風車を 1000 基建設しようという「風の王国」を手伝っています。立ち上げのころ足利工大の牛山学長に秋田に講演に来ていただきました。何気無く牛山先生に、風の王国の構想は実現出来ると思えますかと伺ったところ、牛山先生はさらっと「出来ますよ。私が風力を始めた時、日本には風車は 1 基も無かったんですから。」この答えにははしびれました。「継続は力」と言うけれど本当にそう思います。

風力発電適地

この仕事をしていると、業界外の方から風力発電はどんな場所が適しているのですかと良く聞かれます。私の回答はだいたい次の 2 つ。

1) 2 時間ドラマの夜 10 時 45 分ごろ、船越栄一郎や山村紅葉が立っているような場所。この場合は断崖絶壁の上の可能性が大きく、地形の割増係数が大きくなり風車の機種選択に困るかも・・・

2) 現地に立った時、思わず石川さゆり、八代亜紀の唄が出て来るような場所。加山雄三やチューブの歌を口ずさむ様な場所では駄目。子供にこの説明をしたら八代亜紀を知らなくて、変な顔された。さらに余談ですが、天城越えでも良いの？とうちの妻。伊豆半島に沢山風車が建っているの知らないらしい。

最後に

一般的な風車、いわゆるアップウインド型風車は向かい風でなければ回らないと言う趣旨の事を最初にかきましたが、ご存知の様に、アップウインド型の反対側にローターの付いたダウンウインド型風車というのが有ります。この型の風車は追い風で回ります。

「風車は追い風では回らない」という「風評被害」をものともせず、FIT の追い風に乗って「飛ぶ鳥を落とす勢い」なのはダウンウインド型風車を作っている代表理事の会社だけ???

お後がよろしいようで。